

宇都宮大学教職大学院における学修成果の検証

—修了生およびその所属先への調査を基に—

和井内良樹・小野瀬善行・菊地 高夫・尾崎 承子・司城紀代美

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第7号 別刷

2020年8月31日

宇都宮大学教職大学院における学修成果の検証[†]

—修了生およびその所属先への調査を基に—

和井内良樹*・小野瀬善行*・菊地 高夫*・尾崎 承子*・司城紀代美*
宇都宮大学大学院教育学研究科*

本研究は、宇大教職大学院の修了生およびその所属先に対して調査を行い、教職大学院での学びが教育現場でどのように生かされているのかを検証し、学びの成果と課題を明らかにすることを通して、今後の宇大教職大学院の在り方について検討するものである。修了生の所属先へのアンケート調査、修了生およびその所属先への聞き取り調査を通じて、教職大学院での学びの成果が、修了生本人、修了生の所属先の双方から肯定的にとらえられていることが明らかになった。今後さらに詳細に学びの成果の検証を行い、今回の調査で挙げられた課題について検討していく必要がある。

キーワード：教職大学院、学修成果、アンケート調査、聞き取り調査

1. 問題の所在

宇都宮大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻（以下宇大教職大学院）は2016年4月に開設され、その後2020年3月までに64名の修了生を送り出している。今後は修了生がミドルリーダーやスクールリーダーとして自ら教職大学院で学んだ成果を学校現場で生かすことがますます期待されている。

教職大学院は高度専門職業人としての教師の育成を目指すものである。そこで求められる能力として「省察的実践力」がある。これは従来の「技術的熟達者」から、行為の中で省察を行う「省察的実践者」へと転換が求められている専門職の在り方に対応するもので、教師は「教える専門家」から「学びの専門家」へ変わることが求められていることに由来する。教師は教える技術に留まらず、子ども理解や学ぶということについて深い認識が求められる。教職

大学院では、この省察的実践力を身につけ、教育現場でそれを生かしていくことが求められる。

本研究は、宇大教職大学院の修了生およびその所属先に対して調査を行い、教職大学院での学びが教育現場でどのように生かされているのかを検証するものである。学びの成果と課題を明らかにすることを通して、今後の宇大教職大学院の在り方について検討していく。

2. 修了生の所属先へのアンケート調査

(1) 方法

① 対象

2017年3月～2019年3月に宇都宮大学教職大学院を修了した48名が現在所属している職場を対象とする。

② 手続き

2020年3月に対象となる学校等に対して、アンケート調査を行った。配付はE-mailまたは郵送、回収はE-mail、FAX、郵送のいずれかの方法とした。

調査項目は以下のとおりである。

問1 宇都宮大学教職大学院が育成を目指す以下の3つの力の発揮の程度

【学校改革力】学校の同僚や地域と協働して課題解決に取り組む力、児童生徒集団を適切に組織する力、学校改革を推進する力など

[†] Yoshiki WAINAI*, Yoshiyuki ONOSE*, Takao KIKUCHI*, Tsugiko OZAKI* and Kiyomi SHIJO*: Inspection of the Learning Outcomes in the Graduate School of Professional Teacher Education, Utsunomiya University
Keywords: Graduate School of Professional Teacher Education, Learning Outcomes, Questionnaire, Interview Survey

* Graduate School of Education, Utsunomiya University
(連絡先: wainai@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

【授業力】授業をデザインし振り返る力、学習者に深い学びを保障する力、他の教員の授業力向上を支援する力、授業研究を適切に組織しリードする力など

【個への対応力】児童生徒一人一人を理解する力、個に応じる特別支援教育の考え方を学習指導や学級・学校経営に生かす力など

問2 教職大学院修了生の実践力への満足度

問3 教職大学院での学びの成果の具体的な事例

問4 これからの宇都宮大学教職大学院への要望

問1と問2は選択肢による回答（5件法）、問3と問4は自由記述による回答である。

(2) 結果

32名分のアンケートが回収され、回収率は66.7%であった。

問1と問2の回答数とその割合はTable 1のとおりである。なお、各項目の数値は以下の回答を示すものである。

問1：5.よく發揮している 4.ある程度發揮している 3.どちらともいえない 2.あまり發揮していない 1.全く發揮していない

問2：5.とても満足している 4.ある程度満足している 3.どちらともいえない 2.あまり満足していない 1.全く満足していない

また、各項目の平均値について、現職・学卒別、職場別でTable 2、Table 3に示す。

Table1 各項目の回答数と割合

質問項目	5	4	3	2	1	合計
1- (1) 学校改革力	12 (37.5%)	10 (31.3%)	9 (28.1%)	1 (3.1%)	0 (0.0%)	32 (100.0%)
1- (2) 授業力	17 (53.1%)	11 (34.4%)	4 (12.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	32 (100.0%)
1- (3) 個への対応力	15 (46.9%)	16 (50.0%)	1 (3.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	32 (100.0%)
2 実践力	15 (46.9%)	14 (43.7%)	3 (9.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	32 (100.0%)

Table2 各項目の平均値（現職・学卒別）

質問項目	全体	現職	学卒
1- (1) 学校改革力	4.03	4.38	3.00
1- (2) 授業力	4.41	4.67	3.63
1- (3) 個への対応力	4.44	4.58	4.00
2 実践力	4.38	4.58	3.75

Table3 各項目の平均値（職場別）

質問項目	全体	行政	学校	(小)	(中)	(特支)
1- (1) 学校改革力	4.03	4.86	3.80	(3.54)	(4.11)	(4.00)
1- (2) 授業力	4.41	4.71	4.32	(4.08)	(4.67)	(4.33)
1- (3) 個への対応力	4.44	5.00	4.28	(4.15)	(4.44)	(4.33)
2 実践力	4.38	5.00	4.20	(3.92)	(4.56)	(4.33)

問3と問4の結果については考察と合わせて扱う。

(3) 考察

①3つの力の育成

アンケート調査では、宇都宮大学教職大学院が育成を目指す3つの力に関して、5点満点の評価でそれぞれの平均値が、「学校改革力」4.03、「授業力」4.41、「個への対応力」4.44となっており、いずれも高い評価である。

教職大学院での学びの成果の事例を挙げてもらう自由記述においても、学卒・現職の別、学校種別等にかかわらず、3つの力に関連する以下のような記述が見られた。

【教職大学院での学びの成果の事例 より】

<学校改革力>

- ・校内研修においては、自分の意見をはっきり述べ、同僚との意見交換に積極的にかかわっています。先輩の姿や考え方から学ぼうという意欲が高いです。（学卒・小学校）
- ・小中一貫教育の主担当として、教職員はもちろんのこと、地域の方々と協働して本市の小中一貫教育を推進する原動力となっている。（現職・行政）
- ・同僚、特に若手教員に対して、悩みの相談にのっ

たり、学習指導や児童指導に関する助言を与えたりするなど、ミドルリーダーとして活躍している。さらに校内の諸活動において率先して行動し、同僚と協働して学校課題の解決に向けて取り組もうとする雰囲気を高めている。(現職・小学校)

- ・生徒指導主事としてリーダーシップを発揮し、学校改革を推進する力となっている。特に協働性を重視して職務に当たっていることで同僚に良い影響を及ぼしている。(現職・中学校)

<授業力>

- ・教材研究に熱心に取り組み、授業ではICTを積極的に取り入れ、「分かる」「できる」を実感できるよう努めている。また、授業の振り返りを欠かさず行い、自身の授業を振り返るとともに、次時の授業の参考にするなど、大変前向きで意欲的である。(学卒・中学校)
- ・教員の授業力向上を目指す研修において指導助言をする場面で、教職大学院での学びが活かされていると感じた。自分の現場での経験だけでなく、学んできたことも盛り込みながら適切な指導ができていた。(現職・行政)
- ・高い授業力を身に付け、日々の授業実践に大いに役立っている。(現職・中学校)
- ・授業や生徒指導の目標を明確にし、ポートフォリオの活用等で仮説の検証や課題の模索を繰り返しながら、個の特性を意識した取り組みを行っている。(現職・特別支援学校)

<個への対応力>

- ・生徒一人一人を好きになる努力をしているところから、良さが把握でき、認め励ます姿が見られた。一番の根っここのところをしっかりと身につけていることは、「個への対応力」育成の成果と思われる。(学卒・中学校)
- ・生徒の個別の対応に関して、若さを生かして生徒と向き合い、保護者との連絡も密にしています。(学卒・中学校)
- ・学校訪問の際には、主担当である体育科の授業への助言はもちろんのこと、特別支援学級の授業へも適切な助言を行い、授業力の向上を意識した適切な助言を行っている。(現職・行政)
- ・個に応じた支援において、他の学級の教員との協働、保護者との連携をもとに、幅広い視点で実践

することができていた。(現職・小学校)

3つの力が教育現場で具体的に生かされていると考えられる。

一方で、学卒院生については、これから経験を積み重ねることで発揮されるのではないかという指摘があり、学卒院生の学びの成果をどのように評価していくかは今後の課題であるといえる。

②理論と実践の架橋・往還・融合

修了生の実践力への満足度に関して、「5 大変満足している」「4 ある程度満足している」の回答を合わせた割合は90.6%、5点満点での平均値は4.38であった。修了生の実践力に対する就職先等の評価は高いものであると考えられる。

あわせて、自由記述の回答には、高い実践力が理論的な裏付けや丁寧な省察と関わるものであることを指摘する以下のような記述がみられる。

【教職大学院での学びの成果の事例 より】

- ・当該教員は、授業力や個への対応力を発揮するにあたり、やはり自己の教職経験が活かされたと言っています。自己の教職経験と教職大学院での学びが融合し、大きな力を発揮することができたと思います。
- ・学校現場の古い体質にとらわれず、俯瞰的な視点で意見を述べることができる。
- ・日々の実践の上に「学び」が加わり、さらに実践へとというサイクルができあがりつつある。
- ・記録をノートやPCに丁寧に累積することを日常的に行っており、事実をもとに分析したり、考察したりする構えを習得している。
- ・理論と実践との往還を常に意識した仕事ぶりが見られる。実践技術や手法のみに傾斜することなく、理論的な後ろ盾を明確にしたうえで、研修事業に臨んでいる。

宇都宮大学教職大学院の理論と実践の架橋・往還・融合を目指すカリキュラムの成果が教育現場で生かされているものと考えられる。

③地元教育界への貢献

これからの宇都宮大学教職大学院についての要望では、これまでの成果を評価し、引き続き今後に期

待するという意見が複数みられた。即戦力となる教員の養成、学校や地域の中核となる教員の育成を行っていることが、教育現場でも評価されており、教職大学院への期待が高いものと考えられる。

【これからの宇都宮大学教職大学院への要望 より】

- ・引き続き、最新の学術的な知識と実践的な教育活動の融合を図り、栃木県教育界の更なる発展に資するよう、有為な人材の育成に向けた教育機関としての役割を果たすことを期待する。
- ・教職大学院で学んだ教員が、学校の中核となってリーダーシップを発揮していると思う。さらに学校現場で生かせるリーダー育成をお願いしたい。
- ・職場の他の教員を刺激する存在になっているのがありがたい。
- ・これからも教育現場で、教科指導や生活指導、また学級経営において、生徒一人一人に目を向けながら積極的に吸収し成長していくような人材を育て、送り出していただけたらと思います。
- ・教育現場において、これからの即戦力となる教員の育成をお願いします。
- ・現職教員にとっても 学生にとっても魅力的な教職大学院であり続けてください。

今後教職大学院で取り組んでほしい課題としては、

- ・主体的・対話的で深い学びの授業実践
 - ・学校経営に関するマネジメント力
 - ・教科の専門性を高める研究実践
- などが挙げられた。

また、「大学院と関わりながら継続的に学ぶことを大切にしてほしい」との要望もあり、修了生の学びの機会の保障も必要であると考えられる。

3. 修了生および所属先への聞き取り調査

(1) 方法

上記のアンケート調査に加え、修了生および所属先への聞き取り調査も並行して行った。

実施時期は2020年2月～3月であり、修了生4名(教育委員会2名、小学校2名)、所属先の上司(管理職)3名(教育委員会2名、小学校1名)を対象とした。質問項目は以下の通りである。

- ① 3つの力のバランス
- ② 自由度の高い長期実習

③ 現職とストレートマスターが共に学ぶ形態

④ リフレクション

(2) 結果と考察

① 3つの力のバランス

【修了生】

- ・学校改革という視点を学ぶことができたことが研究主任、学習指導主任という立場につながっていることが大きい。現場では目の前の子供のみに目が行きがちになるが、学校全体を大きな視野で捉えどう改革していくのか考え方を知ることができたことが大きい。(現職・小学校)
- ・授業力については、学生時代は教師の指導を中心に見ていたが、大学院に行ってから子供の反応や受け止めから授業研究をしていく必要を学んだ。このことが自分の授業研究や授業づくりに生かされている。個への対応では実際の事例や子供の様子を見たことによって、学校現場での自分の対応を可能にしている。学んだことによって現場でこうしたい、しかし力がなくてできないというところがあり、学んだが故の苦しさ菌がゆさも初任の頃は感じた。そのときにホームカミングデーや在学院生と交流する機会を得ることで、頑張ることができた。(学卒・小学校)
- ・3つの力をバランスよく学べたのは大きく、今の行政の仕事にも生きている。多様な研修を主催する機会が多く、担当者としてそれらの多様な研修に対応することができている。(現職・行政)
- ・院生の年齢層やバランスを考えた時には、「授業力」「個への対応力」への関心が高く、その力を付けたいと思っている人が多い。ただ、「学校改革力」を学ぶことでその2つもより充実していくように思う。それぞれが単体で存在しているわけではないので、この3つを学べる構成は非常に良いと考える。今の仕事では、3つとも同じくらい重要なので、全てを学べて良かった。「学校改革力」を学ぶことができたので、管理職対応にも役立っている。(現職・行政)

【所属先】

- ・(バランスよく学ぶことは)絶対いいと思う。特に行政職は何でも屋というところがある。辞令一枚でスーパーマンにならなくてはならないこともあるのでいいと思う。「リフレクション」の場面で、様々な専門の意見を聞くことも、行政の仕事に生

きているのではないかと思います。例えば、今、特別支援教育の担当も担ってくれていて、研究内容としてはあまりメインではなかったかもしれないが、「ああ、専門的にこんなふうに見るんだなあ」とか「こんなふう先生方は特別支援教育についてやっていたな」とか大学院の中での特別支援教育の先生方との学びが生きているのではないかと。(行政)

- ・ バランスよく専門性を高めていてよい。学校の様々な課題に対する対応力が育っている。授業研究会でのアドバイスをする際に、3つの力はどれも必要なので、軽重を付けることはできない。(行政)

アンケート調査においては、「学校改革力」が最も発揮されにくいとの結果となっているが、インタビューを通して、「学校改革力」について学んだことが下支えとなっていることが明らかになった。学校改革に直接携わる修了生は限られるため、発揮される力としては見えにくい、「学校改革力」について学んだことが根底に生きているのではないかと推察される。

② 自由度の高い長期実習

【修了生】

- ・ 自分がいた現場では気付くことができなかった視点や視野を広げる機会となった。今まで自分が担任している子供に対しては、その子のために何ができるか、特に何をしなければいけないのか、自分の責任を大きく抱えた上でのものの見方をしていた。教育実践プロジェクトでは、第三者の立場で教師の子供との関わりや学校という大きな組織の中での教師の連携の仕方を見ることができたことで、自分事として見る物事や子供を見るのと同時に、違う角度から子供のことを見たり、先生方のことを考えたりする広がりにつながっていったことが大きい。なぜその子はこういった行動をとっているのか、何を考えてそのような姿を見せているのか、少し退いた立ち位置でもものを見ることができるようになった。自分が担当する研修において、先生方がどのように考えて取り組んでいるのかなど、広い部分での物事の考え方などにもつながっている。人とつながり、その学校の課題、学級の課題を知るという新しい組織の中での関わり方を学ぶよい機会となった。(現職・小学校)

- ・ 当初、教育実践プロジェクトは教育実習と何が違うのか自問自答しながら取り組んできた印象だった。教育実習より長い期間子供と接するので、子供の興味関心や好み、乗りやすい発問など細かく丁寧に見ることができたことで、児童理解を深めることができた。現場での先生方の様子も教育実習とは違った見方ができた。担当する学年の先生方と相談しながら授業をつくることによって、一歩踏み込んで先生方の動きも見ることができた。授業を多く参観することで、自分としては1時間1時間で精一杯だったところを、長いスパンで、単元を通して何を学ばせるのか、何をおさえるのか、何を考えさせなければならないのか、改めて学ぶことができた。(学卒・小学校)

- ・ 自由度が高いと言っても、課題を見つけなければならない。学んだ理論を基にここの学びたいなという視点をもって学校に入り、自分の研究テーマをもって学校に入れば課題が見えてくる。課題を見つける力が今の学校の先生に必要。それをどうやって解決するのがミドルリーダーに求められていると思う。行動や時間の自由度は多少あるにしても、その中で、自身の研究テーマと学校の課題をリンクさせた上で研究をするということ。(現職・行政)

- ・ やりながら、院生自身がそこに意味を見出したり、協働することの楽しさを感じたりしていった。実習する中で、変化を見取ることの意味が大きい。子どもや学校に変容が出たり、その変容に院生が気付いたりするには、ある程度の時間が必要だと思う。やりながら「相手側の変化」や「院生自身の変化」が得られる。やっていく中で課題を見つけて改善していくところが、教職大学院の良さだと思っている。現在の仕事は主に一人でやっていて、教職大学院での学びは全て役に立っていて、無駄になっているものは一つもない。教職大学院での経験がなかったら、多岐に渡る仕事を一人で担当することは難しく路頭に迷っていたと思う。全く知らない学校に入る時の苦労を実習で体感させてもらったことも大きかった。学力向上推進リーダーが学校に入る際は、気を付ける点を話したり、一緒に取り組んでいたりしている。その際に「体感」が活かされていると感じる。(現職・行政)

【所属先】

- ・結論から言うと、とてもよいことだと思う。実習があつて学校現場に行くということで、できれば小学校、中学校の両方を経験することは行政職にとってもありがたいことだろうと思う。場合によっては、幼稚園や高等学校の現場の経験もあればよい。テーマを押しつけないということは、学校現場にとってもありがたいことだろうと思う。(行政)
- ・長期だからこそ先生方と信頼関係を築くことができる。また、学校組織や先生方、子ども達の変容も捉えることができると思う。その変容に合わせたアドバイスができるので良い。現在、学校現場に積極的に入っていき、先生方に近い存在で一緒にやっていこうとする姿勢が見られる。実習の経験が活かされている。(行政)

実習を通して「見方」が変わることが重要な点であるといえる。変容をとらえたり、異なる視点からとらえ直したりする力が様々な職場で生かされると考えられる。

異なる校種を知ることの重要性についての言及もあり、今後の実習を考える上での示唆となる。

③ 現職とストレートマスターが共に学ぶ形態

【修了生】

- ・自分が採用されてから十数年間は自分はずっと若手で、何をしても自分が一番に動き一番に取り組むという形だった。これまでの教員人生で誰かを育てるという感覚がなかった。教職大学院に入り、同僚と共に考えていくとか、若手を育てていく必要性を学んだ上で、大きな学校に来たので、その必要性の高さをもの凄く実感させられた。そのことが自分にとって意識していない苦手な部分でもあった。自分がそのような視点をもって現場に戻って来たからこそ、自分が現在の立場にいるんだという自覚することができた。(現職・小学校)
- ・教職大学院で、学校現場に入る時、現職の先生が親身になって相談にのってくださったことが大きかった。今、様々な年代の方がいる中で自分が何をやっていけそうかということを、(教職大学院での)先生の集団の中にいたからこそ、考えることができた。(学卒・小学校)

- ・これからの現場は若い人が増えていくが、そういった若い人とのコミュニケーションの取り方などなど学ぶべきところは大きい。若い人と連携がとれないと、ミドルリーダーとして現場に出たときに厳しいと思う。一方、話し合いの内容が職員室のことや指導案づくりになったとき、ストレートマスターには「ちょっとわからない時もあるかな」という懸念を現職院生はもっていた。当時のストレートマスターは食欲に聴こうとしていたが。また、学んだことが活かせるのは(教員になって)3年目以降だと思う。授業や個への対応、保護者対応等に生きてくるのではないか。初任の前に、院で出会った人の言動も参考になる。(現職・行政)
- ・自分は教師を経験してきて、ある程度の年齢に達しているので、共に学ぶスタイルはいいと思っている。しかし、学卒院生にとってはどうなのか。現職院生はある程度共通理解しているバックグラウンドを飛ばしながら話をしているが、その飛ばした部分を学卒院生がどう感じて理解していたのかは逆に聞いてみたい。一緒の部分もありつつ、学卒院生だけの部分も大切に充実してあげても良いような気がする。教職大学院の先生方は現職院生に対して、学卒院生のお世話を求めなかったように思う。だから、一仲間として関わることができた。実習が別メニューで、学卒院生が附属へ行っていたのは良かったと思う。学卒院生に対しての仕組みがあれば、現職院生の負担はない。学卒院生と関わったことは、今の仕事に活かされている。どんどん入ってきている新採に対して、ベテラン教員が過剰にお世話したり過度に期待したりするときには、学卒院生の苦労や悩みを見てきたことを基にアドバイスができています。(現職・行政)

【所属先】

- ・(学卒院生について)本校でいろいろな意味で戦力になってくれている。子供一人一人に対する対応や同じ悩みを持つ若い先生を助言し育てる立場であり、2年間の苦労の中で身に付いたものなのか、教職大学院で勉強したことが今になって生きてきているものなのか、評価するという点では曖昧で難しい点がある。ただし、3年目の若手教員が本校でいろいろな面で戦力になっていることは間違いない。学校を変えていくという意味や学校

を支えていくという意味、子供たち一人一人を伸ばす意味、そして自分より下の年代の者に経験を話すということでも戦力であり、教職大学院で学んだことが経験になってくれていればいいなとは思っている。(小学校)

- ・若い後輩（ストレートマスター）とさまざまな面で交流をするということは、初任者や若手や後輩の教員とコミュニケーションをとったり育成したりする面でよい。学校訪問などで若手と交流することも多いので。(行政)
- ・現職院生と共に学ぶことで、学卒院生は現場のことを知る良さがあるのではないかと思う。話を聞いたり、聞いてもらったりしている中で、憧れも抱くかもしれない。教育委員会では、若手と関わることも多いので、大学院で学卒院生と接していた経験が活かされていると思う。(行政)

現職院生にとっては、若手の教員とかかわる上での非常に良い経験となっていることがうかがえる。

学卒院生については、教職大学院での学びと学校現場での経験がどのように関連していくのかを詳細に検討していくことが重要であるといえる。その上で、「学卒院生」により適した学びの在り方を探っていくことも必要となろう。

④ リフレクション

【修了生】

- ・教職大学院に入った頃、一つの授業研究を参観しに学校に足を運んだときに、参観を終えた帰りに先輩の一期生が「リフレクションをして帰ろう」と誘ってくれた。最初、授業研究会で協議する時間もあったので、改めてリフレクションをする必要性が分からなかった。その大切さをもの凄く教職大学院にいる時に感じる部分が大きくて、同じものを目指す、同じ教育観を持つ者同士で同様のものを観たことに関して語り合っていく。自分が観ることができなかったものを見取っている先生がいて新たな気づきを知ることができたり、共通するものを持った人たちと、どういう風にそれを見たかとか受け止めたかということが多層的に重ねていったりすることは凄く貴重な時間である。このように学んだことが、同僚の先生たちと観た授業について語り合ったりとか、日々の児童指導のことで情報交流したりとか、自分たちが行って

いることを自分自身だけの考えで進めていくのではなく、学年や学校の先生たちと所々立ち止まりながら、いろいろな考え方を共有したり自分たちの取り組みを振り返ったりするような意識が身に付いたことにつながっている。自分一人で子供を見ていると単一的な凝り固まった見方に陥りがちになってしまいそうなところを、多様な先生たちと話をしているいろいろな見方を知ることによって柔軟に対応することができる。小さい部分での次への指導の在り方やこれまでの指導の在り方を振り返る習慣につながっている。(現職・小学校)

- ・自分は一面的な見方になってしまうところがある。(リフレクションで)自分が見取ったものを周りの先生が別の視点をくださるということは有り難いと思った。今も学年の先生と話す時にも、自分のクラスの子供が他の先生から見てどうなのかということをさりげなく聞いてみたり、自分が見て「○組の◇さんがこうだったよ」と話したりする中で、その子に対する見方をお互いに深めていくことができていることに、リフレクションを重ねてきた成果が生かされている。(学卒・小学校)
- ・あった方がよい。2年目は月初めにチームで話し合っていたが、月に1回は、他チームとやってもよいのではないか。例えば、授業力を中心に学んでいても、そこで、ICTや特別支援教育の視点からの話を聴くことで、レベルアップすることができる。当時、合同のリフレクションはなかったが、発表に向けたまとめの時期に担当以外の別の先生の話の聴きに行くということをやっている人もいた。複合化したリフレクションを意識的に入れてもいいと思う。いずれにしても、リフレクション・省察は大切であり、自分にとって勉強になっている。(現職・行政)
- ・ずっと同じパターンのリフレクションだけでなく、途中に違うスタイルを入れても面白いのかなと思う。リフレクションは自分の考えに気付くことのできる大切な場だった。自分でやっている時は考えがまとまっていないことが多かったが、リフレクションで話す中で「あ～自分はこういうことを気にしていたんだな」と気付ける。リフレクションで他人の話をじっくり聞くことができるのもよかった。そもそも教師は、他人の話を聞くことが苦手な人が多いと思う。つい話したくなってしまうがちだけれど、リフレクションのゆったりとし

た時間の中で、それぞれの意見を聞くことによって、自分にない考えを知ったり、他の院生の人となりに気付いたりすることができた。そういったことは、現場に戻っても大切な部分だと思う。授業を見た後すぐに、先生方と授業を振り返るリフレクションを今も継続している。教師の力量形成に関しては「自分で気付く」ことが重要なので、「リフレクション」とあえて言葉に出して伝えたり、皆さんにもやっていただいたりしている。(現職・行政)

【所属先】

- ・学んだからこそ今が難しいというところがある。例えば、リフレクションという言葉は、現場ではまだ一般的ではない。若手を育てるという意味では、自分がどんどん若手を捕まえてリフレクションの場を身近なものとする手法は生きているし、やろうとしていることが具現化できている。しかし、リフレクションという文化がない時に、どうやってアプローチして学校を変えていったらいいのかという際に、今までだったら学校現場の経験の中で自分で見つけていくのだろうが、リフレクションということを学んだがために、リフレクションという手法が使えない、通用しない、それが自分として上手くいかないとなると、どういう手法で迫っていったらいいのかというところで苦労をしているのではないかな。なぜリフレクションをするのか分からなかった立場から逆の立場、今はリフレクションをしたい立場で「なぜそんなことしなければならないのか」と言われてしまうと、自分はどう進めていけばいいのかということで、袋小路に入ってしまった壁に当たってしまった、それをどう切り拓いて自分の今の立場として進めていくのかという時に、自分の思ったことが上手くいかなかったりするということで苦労している。現場に出た上での壁なので、それを乗り越える中で、教職大学院で勉強してきたことが、必ずベースになったり生きてきたりという世界に入っていけると思うので、今は苦労するだけ苦労したらいいのだろうなと思っている。(小学校)
- ・実は、このような場は行政でもあってもよいのではないかなと思っている。行政でもどうしても個業が中心となってしまうので、その中でいろいろな視点からアドバイスをもらうことが重要であるし、

それが重要であるという認識をもてることが重要ではないか。また、見通しをもってどのように研究を進めていくのかという経験は、行政においても今の仕事を振り返り、見通しをもって計画を進めていくというスキルの向上につながっているのではないかな。自分の仕事をふり返るということが大切である。(行政)

- ・お互いに自分を出すことが大切だと思う。話すことを通して整理できるし、聞きながら自分を振り返ることで充実していく。話し合うことで、気分が楽になることもある。

指導主事の立場でも、フットワーク軽く学校に入り、こまめにリフレクション（話し合う）のようなことを行っており、学校の先生方からも相談を受けることが多い。(行政)

教育現場では「リフレクション」という言葉がまだ一般的ではないことから、それを周囲と共有することの困難性と重要性の両面が指摘されている。教職大学院で「リフレクション」の経験を重ねながら、大学院終了後にどのように生かしていけばよいのかをイメージしていく機会も重要であるといえよう。

また、リフレクションの本質を失わない形で、様々な形態を模索していくことも必要と考えられる。

4. 総合考察

アンケート調査、聞き取り調査を通じて、教職大学院での学びの成果が、修了生本人、修了生の所属先の双方から肯定的にとらえられていることが明らかになった。

例えば、指導主事などの行政職においては、教育に関する幅広い知識が求められていることもあり、実習等で身に付けた課題発見・解決力が教育委員会における研修等の企画・運営にも活かされているといえる。自分の教科専門に留まらず学校現場に対して様々な領域や教科について指導・助言を行わなければならない、その対応に教職大学院の学びが結びついていることが実感を持って語られていた。三つの力をバランスよく学ぶという本教職大学院のカリキュラムの有効性を様々な観点から確認することができた。

ただし、今回は質問項目や聞き取りの対象者が限られたものであったため、今後さらに詳細に学びの成果の検証を行い、今回の調査で課題として挙げら

れた、学卒院生のより良い学びの在り方、リフレクシヨンの教育現場への生かし方等について検討していく必要がある。

また、教育委員会への聞き取り調査の締めくくりにおいて、「在学中に自地区の院生がどのような学びや研究をしているか把握したい。それが、その後の本人や学校現場にとってwin-winになるのかを考える判断材料にもなる。」の発言があった。任命権者やサービスの監督者への発信方法についての今後の示唆となると考えられる。

令和2年4月1日 受理

Inspection of the Learning Outcomes in the Graduate School of Professional Teacher Education, Utsunomiya University

Yoshiki WAINAI, Yoshiyuki ONOSE, Takao KIKUCHI, Tsugiko OZAKI
and Kiyomi SHIJO